

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281
e-mail: blrhg@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhg.org/>



所長の諏訪山だより

大阪市の人口は「4,000人！」

関西大学に在職中のこと。私のゼミに大阪市旭区から通っていた学生がいて、私が大阪市の人口は何人かと聞いたところ、その学生は少しばかり考えて、「4,000人！」。私が「関西大学に在籍している学生だけで2万7,000人いる」と言うと、間髪を入れず「4万人！」。また、1950年代は日本映画の全盛期で、映画が娯楽の王様だったという話を学生にしていたとき、大映という映画会社の京都撮影所に専属の大工さんが何人いたと思うか、学生に問うと、「5,000人」という答え。これらはごく一部の特異な事例ではなく、私は多くの学生との問答で、数え切れないほどの珍回答に出会ってきた。

1931年の満州事変から45年の敗戦までのアジア太平洋戦争で死亡した日本軍兵士は何人かと問うと、「2,000人」。現在、日本で1年間に生まれる子どもの数は？「1,000万人」。無人島も含めて日本列島には島がいくつある？「30」。吹田市の人口は？「100万人」。多くの学生は、数のリアリティをもっていないのである。それは大阪市の人口が275万人であるとか、1950年代の大映京都撮影所に専属の大工さんが500人いたというような知識の問題ではない。数字の現実感がないのである。そのため、さまざまな事物や事象が数のリアリティをとおしてみることができないので、その実態がつかめないのである。そして同時に、数のリアリティをとおしての想像もできないといえる。これでは、さまざまな社会問題の実態がみえてこず、社会問題自体への関心もわかないのではないか。

血友病患者が治療薬（出血を予防するための薬）として用いていた血液製剤にHIV（エイズウイルス）が混入していたため、1,800人前後の血友病患者がHIVに感染したことを授業で紹介しても、学生たちは1,800人という数字の意味が実感できず、エイズ薬害事件の深刻さに考えが及ばないようなのだ。1959年の伊勢湾台風では5,000人もの人が死亡したと言っても、驚く学生は一人もいない。5,000人という数字にリアリティをもてないのだ。そのため、ひとつの台風で5,000人が亡くなるという当時の社会資本の貧弱さも想像できないのである。

2005年ごろから授業での学生たちの反応が次第に乏しくなっていき、私が言っていることの半分以上が学生たちに伝わっていないのではないかと思うようになった。その理由のひとつは、数のリアリティの欠如だと思う。私が頭に思い描きながらしゃべっている事物や事象が、学生たちにはぼんやりとかすんだものとしてしか伝わっていないのではないか。

数のリアリティを獲得するためには、どのような教育が有効なのか。じっくりと考えてみたいし、小中学校の教員の方々とも議論したい。

所長 石元清英

はじめてみよう！

部落問題学習、考え方・実践のヒント (その3)

当研究所では「これからの部落問題」学習プログラム作成研究会を組織し研究を重ね、2017年3月に解放出版社より『はじめてみよう！これからの部落問題学習』を刊行しました。うれしいことにご好評をいただき、2020年8月、2度目の増刷となりました。当欄では『はじめてみよう！』掲載の16のコラムを順次掲載し、部落問題の考え方のヒント、学習実践のヒントをご提供していきます。

▶『結婚差別 私の場合』／北谷錦也（兵庫県稲美町立稲見北中学校校長（当時））

部落差別は、就職や結婚という人生の転機に現れるといわれています。以前は、お見合いによる結婚が多かったようですが、いまは、めぐり合った2人が恋愛して結婚へすすむことが多い時代です。もしかしたら身元調査はいまの方が厳しいかもしれません。めぐり合えた2人の一方が部落に生まれたということだけで反対され、結婚が阻まれることはとても不幸なことです。

周囲を見ても、父母の世代は部落出身者同士の結婚が多いように思いますが、私の世代では、部落出身者とそうでない人のカップルの方が多いと思います。このような状況を見ると、結婚差別は解消しつつあるように思いますが、100組の夫婦がいれば100の物語があります。祝福されて結婚した夫婦もいれば、私のように反対されながらも乗り越え結婚した夫婦もいます。私は、後者の方が多いのではないかと思います。また、差別を受け破談してしまったカップルもいると思います。

部落出身者と部落外出身者の夫婦の数が増えたから、結婚差別が解消されてきたというほど簡単な問題ではありません。しかし、多くのカップルがさまざまな困難や反対を乗り越え夫婦となっているということも事実です。私が差別事象として学んだ結婚差別は、時には人の命を奪う厳しいものでした。もちろん当事者にとって差別の厳しさはいまも昔も変わりません。結婚差別の話をするときにはなかなか「成功例」が語られません。100組の夫婦の100の物語から学んでいくことが結婚差別の解消につながっていくと思います。

私は、解放学級で「差別に負けない『力』をつける」ことを学びました。「差別に負けない」と友だちと誓いあって解放学級を卒業した私ですが、高校・大学と進むなかで出身を隠すようになっていました。差別的な発言が聞こえてきても、反論もできずビクビクするだけでした。部落差別を目の前にしても何も言えない自分の弱さと差別の怖さ、ますます「部落」を避けるようになりしました。

結婚したいと思う相手ができる時も、彼女に出身を伝えることができませんでした。伝えるべきか悩んでいたある日、彼女の父親から呼び出され「親戚に迷惑がかかるから」と反対されました。その時も何も言えませんでした。しかし、彼女は違いました。親戚を訪問し、私が部落出身であることを伝え、2人が結婚すると迷惑をかけるかと問いかけました。どの親戚も理解してくれました。やがて、義母が応援してくれるようになり、私も少し強くなっていきました。

結婚式には義父も来てくれ、みんなに祝福され結婚しました。反対されていたときは、本当に辛かったですが、周囲の人たちの支えが2人の大きな力となりました。

いまふりかえると、つくづく私は恵まれていると感謝の気持ちでいっぱいになります。「1人で（2人で）悩まないで」というメッセージを結婚差別に悩む人たちに伝えたいです。私の経験が少しでも役に立てば嬉しいです、さまざまな体験談を交換できたらと思います。



『ルポ 百田尚樹現象 愛国ポピュリズムの現在地』

石戸諭著、小学館、2020年6月、1,700円(税別)

百田尚樹は多くのベストセラー作品をもつ売れっ子小説家であり、同時にTwitter等で右翼的な発言、差別発言を連発する過激な人物でもある。そんな彼には多くのファンがいる。今現在、どうして彼のような人物が支持されるのか、どうして彼の小説が感動を呼ぶのか。その問いに挑んだのが今回紹介する『ルポ 百田尚樹現象』だ。

本書の著者は、1984年生まれのノンフィクションライター、石戸諭である。元毎日新聞記者で、現在は『ニューズウィーク日本版』『ハフポスト日本版』『文藝春秋』等多数に寄稿している。

石戸の書いたもので私が初めて読んだのは『ニューズウィーク日本版』2019年2月26日号に掲載された「辺野古「反対多数」 沖縄ルポで見た県民分断のまぼろし」という記事だった(ネットで読める)。辺野古の米軍新基地建設に必要な埋め立ての賛否を問う県民投票直前の沖縄ルポである。

この記事は「これまでの沖縄語りから離れ、自由で多層で、異なる声が聞こえるルポルタージュを」という方針で書かれており、賛成派と反対派の対立といったことよりも、賛成反対の背後にある「複雑さ」に焦点を当て、その「複雑さ」を(良い意味で)整理することなく読者に提示していた。物事を理解するためには単純化は避けられない。そして、単純化を進めれば進めるだけ、個々人の思いや背景など多くの要素(「複雑さ」といってもいい)がこぼれ落ちる。こぼれ落ちることに抗おうという石戸の態度に好感をもった。県民投票という言葉が大勝負を前にしてこういった記事を書いたことに感心した。これ以降、石戸の書いたものをみつけたら読むようにしている。

本書は2部構成になっており、第1部「2019 モンターの現在地」は百田尚樹という人物と百田現象について、第2部「1996 時代の転換点」は百田現象と一見多くの共通点を持ち、その源流とも見える「新しい歴史教科書をつくる会」が起こした「90年代の衝撃」(つくる会現象)について、多くのインタビューを行い、社会学や歴史学などの研究成果も駆使して分析している。つくる会現象と比較することで「百田現象は「新しい現象」である」ということを鮮明に示している。ちなみに、第1部より第2部に多くの紙幅が割かれている。石戸は情念あふれる古い世代のほうにより興味をもったのではないだろうか。

本書で石戸のインタビューに答える面々は、百田本人、幻冬舎社長の見城徹、『月刊WILL』編集長の花田紀凱など百田をよく知る人物、藤岡信勝や西尾幹二、小林よしのりなど「つくる会」に関係する人物といった、いわゆる「右派」や「歴史修正主義者」とされることが多い人たちだ。石戸が「百田尚樹について書こうと思っている」とジャーナリストや編集者に明かすと「何を書いてもキャリアの傷になるだけだからやめておいたほうがいい」と忠告されたり、「露骨な嫌悪感を示」されたりした。「彼らは常に百田を無視するように勧めてきた」という。石戸は「リベラルな政治指向を持つ人たちからすれば、これまで私が書いてきたことは「差別主義者、排外主義者に発言の場を与えたもの」になるだろう」とも書いている。石戸がそうした批判を予想しながらも、そういった面々の話を熱心に聴いたのは、沖縄の県民投票の記事と同じ態度を本書でも維持しているからだ。

本書は、社会の分断が深まるなかで、それを乗り越えようという取り組みのひとつである。一旦読み始めたら、物足りない、不快だなどと感じて最後まで読み通してみしてほしい。(ka)



2020年度第4回人権セミナー

事前申し込みをお願いします

「同和対策事業から平等を考える」

○日時：2021年2月6日（土）14時～16時

○場所：兵庫県立のじぎく会館 101・102号室（定員30人）

○料金：正会員（個人）：無料

定期購読者（個人）・学生・賛助会員：500円

一般：1000円

※当セミナーの趣旨に賛同する方はどなたでも参加できます。

1965年の同和対策審議会答申は、部落問題を「日本国憲法によって保障された基本的人権にかかわる課題」であるとし、その解決こそが国の責務であり、国民的課題であると明言しました。

これを受けて、1969年同和対策事業特別措置法が成立。10年の時限立法でしたが3年間延長、その後新しく法律が制定され、2002年の3月まで特別対策が33年間続きました。

主にとりくまれたのは住環境整備、公営住宅や社会福祉施設（保育所、高齢者施設、隣保館）の建設、雇用の創出、奨学金などの事業でした。

同法により、被差別部落の環境や生活の改善は一定程度進みましたが、社会における差別意識が克服されたとはいえません。

同和対策事業により、何が改善され、何が課題として残ったのか。「平等」とはいったい何なのか。講師の柴原さんとともに考えます。

○お問合せ：ひょうご部落解放・人権研究所

電話：078-252-8280 FAX：078-252-8281 e-mail:blrhyg@extra.ocn.ne.jp

■ Twitter はじめました！

研究所の公式 Twitter を開設しました。ぜひフォローをお願いします。また、研究所のホームページを見やすく、活用しやすくするため、順次リニューアル作業を進めています。なお、FB はログインができなくなってしまう、更新ができないためお休み中です。

事務局から

- 先月飼い猫が死にました。24歳と半年生きました。この欄で、猫のことにたびたび言及したので、ご報告まで。いまだにあちこちから亡猫の毛が出てきて、そのたびに思い出します。さびしいことです。(ka)
- ナイキのCMが差別をとりあげたと話題になった。ネットには「日本を貶めるな」との声があふれる。いやいや、ちょっと待った。そもそも朝鮮学校に通っていた生徒が、日本の学校に転校する設定はいかがなものか。違和感しかない。(K)
- 今年は年に一度会うことを楽しみにしている友人たちと会えなかった。一方、オンラインで違うつながりもできた。「元の世界」に戻ることはないだろうから、公私ともにいろんな可能性を見つけていかないと(H)
- 最近、ものすごい勢いで言葉を理解し、話し始めた娘ちゃん。「ママ！ママ！」と呼びかけてくる姿にキュンキュンしています…♡(ひ)